

Title	しまねアカデミアという挑戦 3 : 超学際研究の推進と課題
Author(s)	安藤, 二香; 田原, 敬一郎; 岩瀬, 峰代; 吉澤, 剛
Citation	年次学術大会講演要旨集, 34: 817-820
Issue Date	2019-10-26
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16640
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

しまねアカデミアという挑戦 3—超学際研究の推進と課題—

○安藤 二香（政策研究大学院大学），田原 敬一郎（未来工学研究所），
岩瀬峰代（島根大学），吉澤 剛（オスロ都市大学）

1. はじめに

現代社会が複合的な社会問題に直面する中で、その解決に向けた活動や施策が各所で展開されている。社会的企業、市民社会組織、そして大学をはじめとするアカデミアもその例外ではない。しかしながら、日本の大学は、教育・研究・社会（地域）貢献という3つの役割をどれほど果たしているのだろうか。あるいは、国の科学技術政策では、多様なステークホルダーとの対話・協働による共創的イノベーションの推進を掲げているが、超学際研究に取り組むことができる環境が整備されてきたのだろうか。

しまねアカデミアは、大学や組織の枠を超えて超学際的な研究活動を育みながら、大学の持つ3つの役割を一体的に実現しようとする運動である。2017年から構想を育み、これまでに研究集会を3度開催した。その成り立ちや第1回研究集会（2017年8月）については、2017年度の本学会年次学術大会で（吉澤ら2017）、また、第1回から第2回研究集会までの取り組みの中で、2つの地域課題からプロジェクトが立ち上がりつつある状況について、2018年度に報告した（安藤ら2018）。本報告では、第2回研究集会後の活動と第3回研究集会を通して、2つのテーマのその後の経過を紹介するとともに、しまねアカデミアの世話人である報告者4名の視点で、それらを通して見えてくる共創を育むプログラム開発の可能性や課題について議論する。

2. 発足から第2回研究集会までの振り返り

2017年3月から島根で「アカデミア構想」を実現できないか、地域のステークホルダーや研究者へのインタビューを重ね、同年8月に第1回研究集会を奥出雲町及び雲南市吉田町で開催した。研究者や地域の人たちが双方向で対話・知識交流しながら、鳥獣被害と狩猟をテーマに持続可能な地域についてアイデアを出しあった。また、たたら製鉄を活用した新しい観光のあり方について、ダークツーリズムと持続可能な開発を切り口に議論を行った。その結果として、「生業学校」及び「比較神話学」プロジェクトのタネが浮かび上がった。その後、2つのプロジェクトのタネを育むため、インタビューや小規模の研究集会、打ち合わせを重ねた。

そして、2018年8月に2つのプロジェクトのタネを具現化することを目的として、第2回研究集会を開催した。生業学校プロジェクトは、地域を巻き込みながら鳥獣被害の原因を把握し対策を立てるための「集落環境診断」を実施し、新しい解決策を探るワークショップを開催した。地元住民のみならず、都市部の一般市民も巻き込めるような実用的なアイデアが出され、プロジェクトの形が見えてきたように思えた。また、比較神話学プロジェクトは、この研究集会の中で地域の神話にまつわるエクスカージョンとワークショップを開催し、企画段階から地元住民と研究者との協働を図った。また、比較と交流の視点から、世話人の一人と関連の深い宮崎県高原町との交流にも取り組んだ。加えて、新たに日本人研究者と、そのつながりから海外研究者を招聘し、ローカルなテーマが学術、あるいは海外の視点からどのように位置付けられるのか、企画を練る段階から今後の展開可能性まで、議論を行った。その過程で本プロジェクトにはCODAMA (Citizen Oriented Digital Archives of Mythology and Archeology) という名前がつけられた。直訳すると「市民に根ざした神話学・考古学デジタル・アーカイブス」となるが、研究のための研究ではなく、地域で暮らす人々が大切にしているものを守りながら研究者と地域の人々が一緒になって取り組もうという想いを表したものである。

3. 第3回研究集会までの経緯

3.1. 生業学校

前述のように、第2回研究集会のワークショップで実用性の高そうなアイデアは出たものの、具体的なプロジェクト化までは至っていない。本テーマは、地元の若手ハンターの問題意識を中心に始まり、ワークショップでは若手ハンターのみならず、ベテランハンターや農家、自治体職員などの地域住民も

巻き込み議論を行った。しかし、アイデアをすぐにアクションにつなげられるほどの体制はなく、特に地元の若手を中心にどのように地域の関係者を巻き込んでいけるかという点が大きな課題として浮上した。また、研究者側については、世話人が本テーマに合致すると考えた大学研究者兼ベンチャー実務家を招聘したが、よほどのインセンティブがなければ研究や事業化に向けた検討をすぐに起こすという事は難しい。そのため、当該地域で具体的なアクションに向けたプロジェクト化をすぐに試みるのではなく、同様のテーマに取り組む先進地域や広域で影響力を持つキーパーソンと交流しながら、地域を超えた学習や共助の仕組みづくりに向けた取り組みが重要ではないかと思われた。また、持続可能な問題解決を目指すためには、ビジネスとして成立するスケールが必要であり、より広域で市場化の可能性が見えることも重要である。すなわち、特定地域の成功を横展開するという発想ではなく、より上位の階層から問題解決を目指すアプローチに切り替えることが有効と考えられた。

3.2. CODAMA

第2回研究集会後、CODAMAは新たなアクターを取り込み、様々な展開がなされている。また、それに伴い、課題も生じている。2018年8月の研究集会では、比較神話学をテーマに宮崎県高原町の方々を島根に招聘し、神楽の比較を中心として研究を進めるアイデアが生まれた。同年12月には宮崎県高原町に、研究者と島根の地域おこし協力隊の方とともに訪れ、神楽の鑑賞や地元住民の方々との交流を行った。しかし、神楽研究を牽引するシニア研究者が不在な中、結果としてキャリア形成段階にある若手研究者に過度な期待をかけざるを得ない状況となった。

一方、本プロジェクトでは、現代社会の中で失われつつある神話や民話などの伝承を市民と研究者による協働でアーカイブし分析することも一つの柱となっている。こちらについても、当初は神楽をはじめ神話を中心に展開する想定であったが、地元の教育委員会の方や地域おこし協力隊、島根大学の学生らも一緒になって、主に民話に関する文献の収集や聞き書きなどを実施してきた。精力的に活動を展開する若手研究者がこれまでも民話に関する分析を行ってきたことや、論文のためのデータ収集がしやすいなど、研究業績に結び付きやすいことが要因と考えられる。こちらでもキャリア形成の問題があるが、そのような中でも、研究者や地元の人々が自律的に交流し、アクションにつながるという互恵的な状況が生まれつつある。

このように、神話や神楽から構想はスタートしたものの、民話を中心に展開がなされる中で、2018年秋に申請した民間財団のファンドに採択され、2019年度は予算を獲得することができた。申請時には神楽研究を中心に据えて、着地型観光の要素を取り入れた国際シンポジウムを開催する内容で提案を行った。そのため、神楽よりも民話をテーマとして研究が展開される中で、メンバー間で認識のずれが生じるようになった。東京在住の世話人の一人は、島根と宮崎をつなぐ神楽研究を残すこと、また、神楽研究の中心を担えるようなメンバーを新たに加えながら、若手研究者が無理なく参画できるような方向を模索した。しかし、すぐに新たなメンバーを加えられるというものではない。民話を中心に活動を展開してきたメンバーが、神楽研究や、神楽を中心としたシンポジウムにエフォートを大きく割ける状況でもなかった。CODAMAの取りまとめ役として期待される研究者たちは、将来的に神楽を研究に取り込んでいきたいとは考えているものの、直近で取り組むには難しい状況であった。加えて、宮崎側の体制は、時間をかけて整えていった島根ほどではなく、世話人の一人の個人的な関係性に依存している状況であるため、緩やかな連携を模索する方向となった。そのような状況の中で、イベント開催にあたっては、着地型観光の開発に関心を寄せる地元のコーディネーターが地域のステークホルダーとの仲介をはじめ積極的に提案を行った。Slackを用いて日常的に関係者間でコミュニケーションはとってはいるものの、こうした状況変化に関する十分な確認を行わないまま検討を進めた結果、第2回研究集会での議論や民間財団の申請書をベースとした神楽が中心なテーマに据えられたまま第3回研究集会の準備が進んでいった。

それぞれのアクターがそれぞれのモチベーションで動き、かつ地理的に離れていたこともあって、世話人が問題の全体像を認識・俯瞰・共有することに時間がかかった。結果として、研究助成の当初提案を踏まえつつも、神楽、民話、どちらも取り込むようなテーマ設定を行うことでバランスをとるよう調整を図った。また、シンポジウムとは別に、地元コーディネーターの要望を取り込みつつ、研究に重点を置いた研究会を企画することで、実務家、研究者双方にとってメリットが得られるようにした。

4. 議論

4.1. プロジェクト化の意義と課題

多様なステークホルダーとの共創を育むプログラムの創出に向けては、具体的なプロジェクトと並行して議論することが重要であることを昨年度に報告した。2つのテーマを見比べると、プロジェクト化されファンドが獲得できた CODAMA の方が、具体的なアクションとともに、それらが新たなステークホルダーの巻き込みにもつながり、進展している様子がうかがえる。データの収集や研究会、シンポジウムなど、具体的に協働する体験は、様々な問題が顕在化する一方で、上手くそれらを乗り越えることができれば、関係性の深化にもつながる

一方で、ファンドの獲得により活動資金の一部が確保できたものの、それによって生じる課題もあった。例えば、実務家や若手研究者など、研究助成の獲得と活用経験が少ない人にとっては、研究の進捗や不確実性を踏まえた柔軟な対応ができず計画書に記載した内容に縛られてしまうこともあれば、逆に計画書を意識せず、ファンド終了時のアウトプットやゴールを見据えないままそれぞれが必要と思うことを実施し、予算が不足するといった状況も見受けられた。このような研究助成の計画書に対する認識や対応の違いは、様々な問題に発展する可能性がある。

また、当初のしまねアカデミアは、参加したい人それぞれが資金を持ち寄り、自分の研究や活動にも生かしていくというコンセプトがあったが、ファンドを獲得したことで、持ち寄る、との意識は薄れたように思われる。ステークホルダーの巻き込みを図れば図るほど、例えば研究集会に参加するための旅費は膨らむ。そのため、ある人は獲得したファンドから旅費が支給され、ある人は自分の持つ別の研究費や活動費から捻出するという状況が発生しうる。特定の人が不足分を補うために、ファンドの申請や管理をする必要が生まれ、ファンド疲れも懸念された。

このように、プロジェクト化することで発展する一方、予算確保やメンバー間の調整なども必要となる。研究開発の特徴を理解した上で、支援的なプロジェクト・マネジメントが可能な体制が重要であるとともに、立場やコミットメントの程度が異なる多様な関係者が関わることから、明文化された行動規範の必要性がうかがえた。

4.2. 共創を長期的に育む

生業学校や神楽研究のように、短期的にプロジェクト化が難しいテーマの扱いは課題の一つである。ニーズや関心はあるものの、一定の期限を決めて自ら取り組もうというモチベーションを持ったプレイヤーがいないことが要因として大きい。そのため、世話人がイベント等を企画し、新しい人の巻き込みを図ろうとしている状況にあると言える。共通体験や自分とは異質の人々と出会う機会を上手にデザインし、関係性を維持・構築しながら、プロジェクトが生まれやすい環境をいかに育むかが、プログラム・マネジメントとして重要であろう。

4.3. しまねアカデミアのアウトカム、役割、効果とは

これまでの活動を振り返り、しまねアカデミアの役割やプログラムとしてのアウトカムが何かを今一度考えてみたい。アウトカムを考える上では、カスタマーを想定することが重要であるが、しまねアカデミアのカスタマーは主に、以下の4つに整理できる。1) 社会課題に研究として取り組みたい研究者、2) 地域貢献活動をしたい、学びたい学生、3) 地域興しに取り組みたい行政や NPO、企業などの実践者、実務家、4) 超学際研究のマネジメントの専門性を発揮・向上したい人々、である。これらのカスタマーごとに、しまねアカデミアに関わることで及ぼしたい変化や、そのために必要な役割について検討する。

まず、1) の研究者については、新しい研究アジェンダの設定や知識生産に結び付くこと、ファンドの獲得などの展開が挙げられる。そのためには、地域の人々と研究者をつなぐネットワークのハブとしての役割が重要となる。実際に、CODAMA でアクティブに活動する研究者からは、通常であれば地域の人々と関係性を築くまでに1年はかかるところを、すでにできあがったネットワークに入り込むことができ、研究速度を高める効果が得られている、との声が寄せられている。ただし、世話人や関係者が信頼のおける者かどうかは重要なポイントであるとの指摘もあった。また、その地域特有の研究資源が得られるという点も挙げられる。例えば、地域にまつわる民話や神話、儀式、風習などを記した書物や、それらを語るができる人、日常風景は、その地域でなければ出会えないものが少なくない。

2) の学生については、1) の研究者が教育活動の一環として CODAMA プロジェクトへの学生の参画を促しているが、座学では得られない、Project-Based Learning (PBL) で期待される学習効果(課題

解決能力や総合力の育成、チームで解決する能力、自主性の向上等)が期待される。また、地域への関心の増加、ひいては、その地域での就業や定住も期待される。しまねアカデミアで出会った人々の中には、地域の伝統や文化を愛し課題解決に向けて新たなチャレンジを試みようとする地元の人や、大都市圏から地域おこし協力隊として移住し、地域の魅力を基に起業しようとする者、神楽を踊り続けるために地元に残る若者などがおり、学生が将来を考える上で、選択肢の幅を広げるものになる可能性がある。

3) の地元の人々や企業などの実践者、実務家については、地域課題の解決による **well-being** の向上や、地元の人々にとっては日常となっているものを研究者の視点からある種の外部評価を得ることで価値を再発見すること、それらを着地型観光などの新規ビジネスに活かし地域経済効果をもたらすとともに、地域への関心やシビックプライドを醸成することが挙げられる。シビックプライドの醸成を目指したい地元の人からは、研究者が課題解決に取り組む考え方や手法などを、地元の中高生の地域学習等に展開したいというニーズが寄せられたこともあった。現状では対応できていないものの、2) の学生は大学生のみならず、地元の中高生なども含まれる可能性がある。

4) のマネジメント人材に対しては、プログラムデザインやプロジェクト・マネジメントの試行や経験を積むことができる場が期待される。昨今、URA やプログラム・マネージャーを志す者の数が増加し、学際研究や超学際研究の促進に関心を寄せる者も少なくない。しかし、日常業務の中では取り留めず、実践の場がない者もいる。しまねアカデミアは緩やかなネットワークであるため、マネジメントは容易ではないと思われるが、世話人がそうであるように、所属組織を離れた OJT の場として機能することが期待される。

5. まとめ

現在、しまねアカデミアに関与した人々に対して、2019年9月27日から29日に実施した研究集会の結果を踏まえたアンケートおよびヒアリングを行っている。4で示した役割や効果について、関与者からの情報を基に自己分析し、今後の活動に反映させていきたい。

2017年度に吉澤らがしまねアカデミアについて報告した際には、社会問題の解決に向けた活動が各所でなされている中で、“キラキラ系”の問題3点を報告している。1)「将来的な可能性や物事のポジティブな側面を強調するが、利害の衝突が顕在化するような意思決定に向けた集約への接続や実施にまで主体的に関与を行わない」、2)「創造的な対話の場づくりを重視し、オープンなダイアログや異業種交流によって個々の参加者の学びや自発的なつながりを促すが、知識の蓄積や活動の評価分析・体系化をしないか、その体制を外部化したままにする」、3)「短期的なビジネス化を重視し、公共的意識や長期的課題、人材育成の視点が薄い。特に若い世代の参加意欲を喚起するが、その貢献に正当な対価が払われない場合が多い」。3年間の活動を振り返る上では、自戒の念を込めてこれら3点について考えることが必要である。

参考文献

- ・ 吉澤剛・岩瀬峰代・田原敬一郎 (2017) 「しまねアカデミアという挑戦：学術界の革新に向けて」 研究・イノベーション学会年次学術大会講演要旨集, 32: 750-754.
- ・ 安藤二香・田原敬一郎・岩瀬峰代・吉澤剛 (2018) 「しまねアカデミアという挑戦2：共創を育むプログラムの開発に向けて」 研究・イノベーション学会年次学術大会講演要旨集, 33: 746-749.

謝辞

しまねアカデミアの活動を進めるにあたっては、2018 度島根大学人間科学部学部横断プロジェクト「市民アーカイブと統計解析による神話機能の再解釈プロジェクト」、2018 年度島根大学ご縁ネットプロジェクト顕彰共同研究プロジェクト「民俗歴史学・心理学による神楽の比較神話学」、東芝国際交流財団 2019 年度採択プロジェクト「市民および他分野協働による神楽の国際比較研究と国際交流の促進」の支援を受けた。また、第 3 回研究集会は、同財団 2019 年度採択プロジェクト「認知比較民話学の国際拠点：日本民話を中心として」と連携して開催した。